

日本語学習者の中間言語における格付与

浅 山 佳 郎

Abstract

This paper discusses the mechanism by which case is assigned to nouns in the interlanguage of Japanese language learners. Although many studies have investigated errors in case assignment in the interlanguage of non-native speakers, few have focused on the underlying mechanism itself. In this paper, I analyze a cross-sectional corpus of speech data from Japanese language learners and examine case assignment through the grammatical interpretation of examples and the distribution patterns of each case. Based on this analysis, I make the following claims about case assignment in noun phrases within the interlanguage.

First, the accusative case marked by the particle *wo* is assigned within the extended VP by little-*v*. Second, the nominative case marked by the particle *ga* is assigned as the default case within the extended VP due to the absence of little-*v*. Third, the particle *wa* can function as a kind of case marker and is assigned by a tense marker at the leftmost position within the TP. Furthermore, this paper argues that all three of these case assignment mechanisms follow rational rules consistent with language universals.

1 はじめに

本稿は、日本語を母語としない発話者の日本語において、名詞への格付与がどのようなメカニズムによるかを観察議論する⁽¹⁾。非母語話者の日本語中間言語における格付与については、誤用研究は比較的におく見られるものの、そのメカニズム自体を問題とする研究は管見のかぎり見られない。

本稿では、『国語研日本語ウェブコーパス』中納言で公開されている「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)」を、非母語話者の発話データとして分析対象とする⁽²⁾。このコーパスの第一次データから 20 人を選び⁽³⁾、その対面型の発話データから「Interview」と「Story-

(1) 日本語の格付与全体については加賀、岸本 (2024) などを参照のこと。

(2) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas/search> (2024 年 9 月 30 日最終確認)

(3) 当該コーパスで使用される発話者記号でいえば、CCM14、CCM37、EAU05、EAU31、FFR17、FFR42、GAT09、GAT39、HHG07、HHG30、RRS03、RRS46、SES05、SES30、TTH20、TTH47、TTR18、TTR39、VVN32、VVN38 の 20 名を抽出した。これはまず、一定の中間言語が形成されているはずであるが学習者としての完成に近いレベルではない中級相当の学習者を対象としたいという目的で、合計 400 点の J-CAT で 150 点から 200 点の学習者を選び、そこからさらに学習者の母語のばらつきを考慮して、中国語、英語、フランス語、ドイツ語、ハンガリー語、ロシア語、スペイン語、タイ語、

telling」の2種類の談話を使用した。このデータを国立国語研究所で公開している「Web 茶まめ」の「現代話し言葉」辞書を利用して形態素解析を行い⁽⁴⁾、その結果を手もとで修正して使用した。こうして形態素解析を行った発話データについて、助詞「ガ」、「ヲ」、「ハ」の用例を抽出し、用例の文法的解釈と各用例の分布整理から、非母語話者の中間言語における格付与を議論していく。

なお本稿では名詞の形態としての格を、「ガ」による主格、「ヲ」による対格、「ノ」による属格の3つと仮定しておく。これはひとえに主題化助詞「ハ」によって主題化される場合に、その形態格を喪失することによる。格は構文的位置を表示するための名詞の形態であり、主題化によって本来の構文的位置を喪失した場合にはそれが表示されなくなるはずだと考える。この3つの助詞以外のいわゆる格助詞「ニ、へ、ト、デ、ヨリ、カラ、マデ」は、後置詞とみなし、述語によって名詞句に付与される格とはしなかった。

ただし議論の都合上、以下の行論では、格助詞「ニ」について「ニ格」という用語を、それ以外の「へ」から「マデ」について「斜格」という用語を使用する。「格助詞『ニ』による後置詞句」といった表現が長くなるのを避けるためである。「ニ格」および「斜格」という用語は使用するが、これらの形態については本稿では格付与の議論の対象とはしない。

2 対格

対格の付与は、言語普遍性の観点からは他動性によって確保される。理論的には多くの場合、音形のない抽象的な機能範疇である little-*v* が主要部として VP を補部にとり、他動性の不可欠な要素である意志的な動作主がその指定部におかれ、そのことによって VP 内部にある名詞句に対格が付与されることになる⁽⁵⁾。この節では、対格付与の言語普遍性が日本語を非母語とする学習者の中間言語としての日本語発話においても同様に認められることを主張する。

今回の日本語学習者の中間言語調査では 640 例の対格の用例を確認できたが、そのうち 20 例は、対格名詞句で発話が中止して動詞が省略されている。また 6 例は述語に形容詞あるいは形容動詞が使用されている。また 10 例は、対格の直後に別の格助詞によって言い直されている。これらをあわせた 36 例を分析対象から除外すると、604 例が対象となる。この 604 例のうち、569 例すなわち 94% 強の用例では、VP 主要部である動詞の補部に置かれた名詞句に対格が付与されている⁽⁶⁾。確認するまでもないが、以下のような例である。

トルコ語、ベトナム語の 10 言語母語話者それぞれ 2 名を選んだ。

(4) <https://chamame.ninjal.ac.jp/> (2024 年 9 月 30 日最終確認)、「現代話し言葉」辞書については伝ほか (2007) を参照のこと。

(5) little-*v* については、Collins(1997)、Arad(1999)、González-Vilbazo ほか (2012)などを参照。また日本語については長谷川 (2007) を参照のこと。

(6) 本稿では、対格が付与される名詞句の位置を、動詞の補部の位置とし、指定部の位置とは記述しないでおくが、基本的には指定部位置にあったとしても同様の議論が成立すると考える。

- (1) a そのあと 日本語と会計学の宿題を しました
 b 友達がみんな ビジネスのことを 勉強してる

対格が付与されている名詞句のほぼすべてが、この(1)例のように動詞の直前位置、すなわちVP補部位置に出現する。

いま総数604の対格用例数の分布を、動詞からの相対的位置によって示すと以下の表(2)のようになる。なお以下の表で「動詞の直前にある」とした用例には、対格名詞句と動詞との間に別の名詞句が無いという意味であり、「ちょっと」や「よく」や数量表現など副詞的要素は出現するものが含まれる。

(2)	対格名詞句の位置	用例数
	対格名詞句が動詞の直前にある	569
	対格名詞句と動詞の間に名詞句がある	35
	合計	604

この表は、動詞の意味構造上で内項として指定される名詞句への対格が、動詞句の構造上のもっとも低い位置で付与されていることを示している。この表で対格と動詞の間に別の名詞句が介入している35例を除外すると、VP内部の動詞の補部位置以外に対格は出現しない。そしてそのことは、little-*v*のような他動性の機能範疇が、非日本語母語話者の日本語中間言語でも言語普遍的に機能している可能性を示唆する。すなわち以下のような構造を想定することができる。なお、ここでは当面の議論として動作主名詞句を「SubN」、目的語となる名詞句を「ObjN」で表示しておく。

- (3) $[v_P[\text{SubN}][v[v_P \text{ObjN} \text{ } \neg \text{Verb}] v]]$

ところで、さきの(2)表で「対格名詞句と動詞の間に名詞句がある」とした35例の内訳をみると以下になる。なお、対格と動詞の間に2つ以上の名詞句が出現する用例が今回の調査では2例だけ存在したが、この2例については先行する名詞句の格によって集計した。

(4)	対格と動詞の間に介入する名詞句	内訳
	対格 + 主格名詞句 + 動詞	2
	対格 + 対格名詞句 + 動詞	3
	対格 + 属格名詞句 + 動詞	1
	対格 + 二格名詞句 + 動詞	19
	対格 + 斜格名詞句 + 動詞	10
	合計	35

この 35 例のうちもっとも多いのは 19 例となる二格であるが、これらは 1 例を除外して、以下のような 3 項動詞のうち二格となる名詞句が動詞の直前位置におかれたものである。

- (5) a 大人が 卵を 庭に 隠します。
b うさぎのチョコレートを 子供に あげまして

こうした必須項の二格名詞句を含む 3 項動詞の格付与とその配置については、さまざまな議論があるが⁽⁷⁾、とりあえずここでは、二格名詞句を含めて VP 内部にあり、そこでやはり他動性を付与する little-*v* によって目的語となる名詞句に対格が付与されると考えることに無理はない。

また斜格とした 10 例のうち 4 例が格助詞「ト」をもつ名詞句が介入したものであるが、そのうちの 2 例は、以下のような用例である。これらはやはり上述した二格と同様に、必須項とみなしう名詞句が動詞直前に生じたものである。

- (6) a ケンのことを 泥棒と 考えた
b 先生は 私を 怠け者と 呼んでました

これら格助詞「ト」をもつ名詞句は、「考える／呼ぶ」がその内容として必須の情報とするもので、本来の位置が動詞直前であり、対格が付与される名詞句はさらにその外側にあると考えられる。これらも上述した二格と同様に、little-*v* による対格付与と矛盾しない。

さらに、二格名詞句が動詞と対格名詞句の間に介入している 19 例のうち、すでに見た 18 例以外の残余の 1 例は、主格名詞句が介入している 3 例のうちの 1 例と同類の現象で、以下のような例である。

- (7) a その時 日本のいろいろなことを 興味に あったから
b マリとケン これを 気が しませんでした

ともに、いわゆる誤用であるが、これは述語が「興味にある／気がする」という格助詞をもった名詞と軽動詞とみなしう動詞によって形成され⁽⁸⁾、その述語が全体として他動性をもって、その直前の名詞句に対格を付与したものである。その意味では、「興味にある」や「気がする」という述語全体に little-*v* が機能しており、本節で主張する中間言語での対格付与メカニズムと矛盾しない。

表 (2) で、対格と動詞の間に別の名詞句が介入するとした用例のうち、残余は 13 例である。

(7) 二格 (与格) の統語的構造については、工藤 (2015) や浅山 (2009) などを参照のこと。

(8) 一種の慣用的な表現である。慣用的述語とかかわる格については、浅山 (2022) を参照のこと。

うち3例は対格が二重に使用された例であり、当面の議論にはかかわらないので、検討を除外する。それ以外には、(8ab)のような主格または属格による動作主名詞句が対格名詞句と動詞の間に介入した例が2例と、(9ab)のような格助詞「デ」または「ト」をもつ名詞句が介入した例が10例ある。

- (8) a これを 警官が 見てた
 b いろいろな食べ物を たぶんお母さんの 作ってて
- (9) a マリの名前を 大きい声で 呼んでみた
 b たくさん時間を 母と 遊びました

これら、主格および斜格（格助詞「デ」と「ト」）の10例は、基本語順としてはそれらの内側に対格名詞句があるべきところである。ただしたとえば(8a)であれば、対格名詞句の内側に置かれている主格名詞句の「警官」は動作主であり、対格が付与されている「これ」は被動作者という解釈しか許されない。つまり(8a)の「これ」は、やはり little-*v* によって動詞「見る」の補部において対格が付与されている。よって、(8ab)や(9ab)の例は、すべてスクランブルによって対格名詞句が左方移動したものであると理解される。

もし対格の付与が、非母語話者の日本語中間言語においても、言語普遍的に little-*v* といった他動性にかかわる機能範疇によるのだとすれば、いわゆる誤用の解釈も異なることになる。

- (10) a 彼の友達と家族を 全部亡くってしまいました
 b 家族の人は 意見を 違うですから 関係は難しくなります

こうした例では、もし動詞を維持しようとするなら、「家族を亡くなる」ではなく「家族が亡くなる」がいわゆる正用であり、同様に「意見を違う」ではなく「意見が違う」が正用であると判断されることになる。いわゆる自他動詞にかかわる格助詞の誤用という統語的な問題とされる誤用である。

しかしもし対格が little-*v* によるとするなら、たとえば(10b)について見れば、そこには

- (11) [*v*P[*VP* 意見ヲ ちがw]*v*]

という構造があることになり、子音動詞「ちがw」と「*v*」との結合により、

- (12) ちがw + *v* → ちがえ／ちがわせ(る)

という動詞が形成されるはずであったことになる。つまり誤用は格という統語的な問題ではな

く、little-*v* 性をもつ動詞の形成という形態的な問題であることになる。同様に、

- (13) a そしてその後は バスを 乗りました
b 男の人は その女のひとを 好きです

といった誤用例も、「乗る」や「好きだ」に他動性が認定された結果である。

こうした対格にかかわるいわゆる誤用は、その判断が難しい例もあるが、明らかに訂正が必要だと思われる誤用は、44 例であり、全体の 604 例に対しては 7% 強でしかない。対格の用例の誤用だけでなく、本来対格が期待される場所に誤って他の格を出現させた誤用例をあわせて示すと、その分布は以下ようになる。

(14)	他の格であるべきところを 誤って対格にした誤用	対格であるべきところを 誤って他の格にした誤用
	主格を誤って対格にした 17	対格を誤って主格にした 21
	二格を誤って対格にした 25	対格を誤って二格にした 17
	属格を誤って対格にした 0	対格を誤って属格にした 13
	斜格を誤って対格にした 2	対格を誤って斜格にした 0
	小計 44	51

すでに (13) 例などで見たように、他の格、とくに主格や二格であるべきところに対格を出現させた誤用は、母語話者の日本語文法としては little-*v* が存在しない統語プロセスに little-*v* 処理をくわえたものである。逆に対格であるべきところに他の格を出現させた誤用は、母語話者の文法では little-*v* が期待される統語プロセスにそれが欠如したものであると考えられる。対格、主格、二格間の誤用は、上の表でも若干の偏向は見られるものの、明確な分布差を示しているとはいいがたい。非母語話者の中間言語内での個別の動詞に対する little-*v* の発動の有無によるものだからである。

一方で属格を対格に誤った例はないが⁽⁹⁾、対格を属格に誤った例は 13 例も存在する。以下のような例である。

- (15) a 九年生までは 同じ内容の 習っていました
b 朝ご飯の 食べて、それから、テレビを見ます
c 子供の時から 『ドラえもん』の 見ました

(9) 今回の調査では、「日本を漫画はあまり読みません」という用例があるが、この発話の発音は「ニホンヲワンガハ～」となっており、発音上での「の」の非実現とみなした。

属格は日本語内部では名詞句が名詞に先行する場合の格であるが、統語的格として目的語に使用される言語もある⁽¹⁰⁾。こうした属格の VP 内部での統語的機能が、非母語話者の日本語中間言語においてどのようにはたらくかという問題については、また別稿にしたいが、ここでは属格が対格の位置に使用されることはあっても、その逆に対格が属格の位置に使用されないという偏向を指摘しておきたい。

いうまでもないが属格の位置は

- (16) [NP[名詞句 + ノ][N 名詞]]

の先行名詞句に付与される格である。後続要素が名詞であるかぎり、ここに little-*v* の機能する余地はない。よって非母語話者の日本語中間言語でも、little-*v* の言語普遍的な性質からいって、対格は属格の位置に出現しないことになる。

また用例は少ないが、格助詞「デ、ト、カラ」など斜格と対格間の誤用についても、斜格であるべき名詞句を誤って対格にした以下のような誤用は存在するが、逆の対格であるべき名詞句に斜格を付与した例はない。

- (17) a そして いろいろな人を 話しました
b 一つの映画は、私の 世界中一番のほしいことを 思います

これらの誤って対格を付与された名詞句は、やはり動詞の直前位置、すなわち VP 内部の補部の位置と推測される構造上の位置にある。よって、little-*v* によって対格が付与された可能性がある。一方で斜格が非必須項となる場合、それは VP 内部の付加詞の位置に生起すると考えられる。いま斜格名詞句を後置詞句と見なしてそのラベルを「PP」で、当該の後置詞句自体を「Noun+P」で示すと、

- (18) [*v*P [PP Noun+P] [*v* SubN [*v*P ObjN ヲ Verb] *v*]]

という、*v*P 内部の比較的高い位置で、かつ後置詞句として出現する。ここには little-*v* による VP 補部への対格付与という機能がはたらく余地がない。こうした誤用の分布も、非母語話者の日本語中間言語において、対格付与が little-*v* によることを主張する根拠となる。

(10) ロシア語やウクライナ語などスラブ系の言語、フィンランド語やエストニア語などバルト・フィン系の言語などに見られる。なお日本語における属格目的語については、越智 (2022) を参照。

3 主格

標準的な議論としては、日本語の主格も、TP（時制辞句）の指定部に移動してきた名詞句に時制辞が付与すると考えられている。他動詞を例にとれば以下のような構造である。

(19) [TP [NP SubN_i ガ] [T' [v_P ti [v_P ObjN ヲ Verb] v]T]

こうした TP 指定部での主格付与という仮説は、母語としての日本語としてみても、構造説明としてやや問題があるが⁽¹¹⁾、本節では非母語話者の日本語中間言語として主格名詞句がどのように生起するかを観察することで、その格付与が何によるのかを考察し、それが little-*v* の欠如を契機として default の格として付与されることを主張する。

今回の調査における主格用例は、全部で 627 例あった。ただし形容詞あるいは形容動詞を述語とする用例が 183 例、名詞を述語とする用例が 10 例ある。形容詞などの用例は主格を考えるうえでは無視できないが、形容詞がどのように格を決定するかについては不分明なところが多く、対格との比較も考慮に入れて本稿では動詞の用例のみに限定する。また対格と同様に、述語が省略された用例が 12 例、主格を付与した直後に別の格助詞で修正された例が 7 例あり、これらを除外すると、動詞述語文の主格用例の総数は 415 例となる。

この 415 例について、対格の際と同様に、主格名詞句の相対的位置による分布をみると、以下の表ようになる。なお、以下の表で「動詞の直前にある」とした用例のなかには、対格の表と同様に副詞的要素が出現しているものも含まれる。

(20)	主格名詞句の位置	用例数
	主格名詞句が動詞の直前にある	353
	主格名詞句と動詞の間に名詞句がある	62
	合計	415

この表からは、主格が前節で検討した対格と同じように、動詞の直前位置の名詞句に付与されていることが示される。対格ほどではないが、対象となる全体 416 例のうち 85% をこえる主格が、動詞の直前位置におかれる。典型的には、以下のような非対格自動詞の例である。

(11) そもそも日本語には指定部を認めないという議論もある。Fukui(1990)などを参照のこと。また浅山(2008)では、非対格自動詞の主格名詞句は、デ格の後置詞句より内側に生起しており、一種の主格目的語と解釈しうることを議論した。

- (21) a 仕事は 時間が かかりますので
b 住宅は高く、消費量が 増えるかもしれません

ただし実際は非対格自動詞の例よりも、以下のような他の動詞の用例の方が多い。

- (22) a 昔の仏教の山の壁に いろいろな絵が 描いています
b 中には いろいろな肉が 置いた

これらの例で「描く」や「置く」は本来他動詞である。しかし、前節で見たように他動性が little-*v* によるとすれば、対格付与がないこの (22ab) のような例では、「描く」や「置く」が他動詞としてではなく非他動詞として使用されていることになる。このように、非対格自動詞か他動詞か、さらには非能格自動詞かといった動詞の種類にかかわらず、動詞直前位置の名詞に主格が付与されている例が多見する。

ところで、本来日本語文法としては、動詞の直前位置にあったとしても

- (23) 太郎が 走った。

などの例であれば、「太郎」は TP の指定部の位置で時制辞によって主格が付与されていると見ることができる。しかし

- (24) 教室で 花瓶が 倒れた。

のような例では、「花瓶」は、時制辞「た」の指定部に移動し、さらにその外側に「教室で」が TP の付加詞位置に移動したとみるより、もともとの動詞「倒れ」の補部の位置にとどまっているとみる方が、複雑な移動という説明を要しない。つまり母語話者の日本語文法においても、TP の指定部での主格付与という権能は、非対格自動詞などを含むすべての主格の付与を十分に説明できる仮説とはなっていない。おそらく他動詞については、動作主または経験者を意味役割として示す名詞句は、TP の指定部の位置に移動してそこで主格が付与され则认为ることができるが、それ以外の主格については別のメカニズムが必要となる。

表 (20) に見たように、非日本語母語話者の発話中には、動詞直前におかれた主格が 353 例も存在する。この動詞直前の主格名詞句を、意味役割から動作主または経験者かそうでないものかに分けると以下ようになる。

(25)	動詞直前名詞句の意味役割	用例数
	動作主または経験者	40
	それ以外	313
	合計	353

この数値は、非母語話者の日本語中間言語としては、動作主または経験者ではない名詞句が動詞句内の補部の位置で主格を付与されていることが多数であり、その主格付与のメカニズムについての説明が必要となることを示している。

さらに、本稿で分析する資料における動詞直前位置の主格の用例は、その共起する動詞に極端な偏向がみられる。以下は、今回の調査で主格名詞句をその直前にもつ動詞のうち使用数で上位となる語とその使用数、およびそれと比較するために、対格名詞句をその直前にもつ動詞のうち使用数で上位となる語とその使用数のリストである。

(26)	直前に主格をもつ動詞			直前に対格をもつ動詞		
	ある	216	(61%)	する	155	(27%)
	いる	13	(4%)	見る	54	(9%)
	できる	9	(3%)	食べる	41	(7%)
	来る	8	(2%)	作る	26	(5%)
	する	8	(2%)	持つ	20	(4%)
	入る	8	(2%)			

動詞直前に主格名詞句をもつ 353 例の 60% 以上が動詞「ある」を使用している。対比的に対格では他動性の典型である「する」が使用数では第 1 位であるが、それでも 25% を超える程度であるにすぎない。なおこの「する」の用例には、「勉強する」や「チェックする」など各種名詞と結合したものも含まれる。

この表で直前に主格をもつ動詞のうちの上位 2 つである「ある」と「いる」のような存在の意味をあらわす動詞は、さまざまな言語でも、存在する対象を唯一の項としてとり、存在の場所を付加詞として動詞句の外部にとる以下のような構造をもつと考えられる。なお語順は日本語の語順を反映させてある。

(27) [[場所] [対象 動詞]]

このとき、存在動詞の唯一の項名詞は、その内項で指定され、外項は存在しない。このことは日本語に限定されずある程度の言語普遍性をもつと考えられる。

また使用数上位にある他の動詞の用例を見ても、以下のように主格を付与された名詞はやはり

内項で指定されている。たとえば (28a) では、通常他動詞であれば「牛肉と野菜を入れる」のように対格で表示される名詞句に主格が与えられており、(28b) と (28c) も本来は他動詞であるべき動詞用例であるので、「ゲームをする／ドラマを見る」と対格で表示されるべき名詞句である。

- (28) a (この料理は) 牛肉といろいろ野菜が 入って
 b たぶん パソコンのゲームが よくしました
 c 『ラストホープ』というドラマが 見えています

つまりこうした用例中の主格名詞句は、論理構造的には内項にあって、もし little-*v* があれば、その内項は動詞句内部で対格が付与されたはずである。ところがこれらの例で対格が付与されていないということは、little-*v* が出現していないことを意味する。また「ある」など存在の意味を担う動詞は、その特性上から言語普遍的に little-*v* が出現しえない。

このことは、動詞直前位置での主格の付与は、little-*v* の欠如、または不在によるということの意味する。たとえば以下の用例は、「やる」という動詞の内項名詞句が、動詞直前位置で主格を付与されたものである。

- (29) 時間があれば、いろいろな仕事が やった可能性があります

これは文脈上で、「時間とお金のどちらが欲しいか」という質問に対して「時間が欲しい」と答えたうえで、その理由を述べた発話である。よってここは、「時間があればいろいろな仕事がやれる」の意味で、「仕事がやった」と発話されたと考えられる。このとき動詞「やる」は、「時間があれば」という条件下での可能性をいうものである。よって動作性を失って可能状態という事態を表現する動詞とみることができる。その意味でここに、言語普遍的な他動性の発露としての little-*v* の出現は考えられず、それが欠如していることになる⁽¹²⁾。

たとえば、「映画が見たい」など、母語話者も動詞を接辞「たい」によって状態述語化すると、対象名詞には主格を付与することになるが、非母語話者の中間言語も同じである。そうした状態

(12) 母語話者の日本語文法としてみた場合、自他が対応する動詞、たとえば「ながれる／ながす」では、両方に共通する「なが」が共通語根であり、時制辞を除外すると、自動詞「ながれる」では「re (れ)」が、他動詞「ながす」では「s」が、それぞれ自他をマークする弁別的要素ということになる。他動詞の場合のこの「s」が、日本語における little-*v* の音形であるとするなら、自動詞の場合の「re」も、同様に非他動性を示す機能範疇ということになる。つまり日本語には抽象的な存在ではなく、音形をもった具体的な形態として、他動性を示す little-*vt* と、非他動性を示す何らかの little-*vi* があることになる。とするなら、動詞直前位置での主格付与は、単なる little-*v* の欠如または不在ではなく、より積極的な little-*vi* の存在という可能性もありうるが、そうした個別言語に依拠する機能範疇が、非母語話者の中間言語に存在するとは考えにくい。

性述語だけでなく、以下のような動詞の形態としては他動詞のものも、文脈的に状態性として発話される場合は、動詞の内項に主格が付与される。

- (30) a 中には いろいろな肉が 置いたから、ほんとにおいしい
 b 一緒に 恋が 始めます
 c たぶんこの仕事 お金が たくさん貰って、この仕事がいい

これらの例では、たとえば (30a) は、「チャーシューパン」という食品を説明する文脈であり、その食品の内容状態を記述する発話である。同様に (30b) はあるドラマについてその設定を説明する発話であり、(30c) は、どのような仕事がいいかという質問に対して収入が高いという仕事の性質を述べたものである。いずれも「置く、始める、貰う」という他動詞が使用されているが、それらはすべて「食品、ドラマ、仕事」の内容を説明するものであり、それぞれの対象がどのようにあるかという状態を記述するものである。

こうした例と先引したいくつかの例は、他動詞が出現しているように見えても、それは状態性または存在という非他動性として解釈されるものであり、それによって対格ではなく主格が「誤用」的に出現することになる。これは対格で、形態的に自動詞と見える動詞に little-*v* が付与された場合の誤用と並行する現象である。

よって動詞直前の主格は、存在動詞または状態動詞などを中心とする非他動性動詞の内項名詞句に対して、それが動詞句の補部にあつて、little-*v* が付与されない場合に、その欠如が反映したものであると考えることができる。いま、その欠如を「 ϕ 」で示し、内項の名詞句を「InterN」で示すと、以下のような構造が想定される。

- (31) [ϕ P[VP InterN(ガ) Verb] ϕ]

しかしながら、little-*v* が他動性を付与して動詞句補部の名詞句に対格を付与するのに対し、その欠如である「 ϕ 」は、固有の特性をもつ範疇ではなく、単にある範疇の欠如であるから、補部の名詞句に固有の格を付与するとは考えにくい。それでも結果的に、内項名詞句は動詞句補部の構造位置で主格が付与されるので、そこには何らかの機能範疇による格付与とは別のメカニズムがなければならない。

ところで、ここまでみてきた主格は、基本的に動詞の内項で指定される名詞句が動詞句内の補部の位置で主格を付与されているものであったが、動詞の外項として指定されている動作主名詞句も主格をもつ。

- (32) たとえば 有名な作家が そこで 住んでいました

といった例である。

こうした動作主名詞句は、この (32) 例にみられるように、比較的高い位置に出現している。いま主格をもつ名詞句を動作主または経験者かそうではないかで2分し、その名詞句が前後に別の名詞句をもつかどうかを調査すると、以下のような分布になる。なお、主格名詞句の前方に別の名詞句があるかどうかについては、主題名詞句は除外した。表内の数値は実数とともに、() 内にそれぞれの項目での比率をパーセントで示した。

(33)	動作主・経験者		非動作主・非経験者	
	前方	後方	前方	後方
他の名詞句有り	17 (19%)	47 (53%)	92 (28%)	14 (4%)
他の名詞句無し	71 (81%)	41 (47%)	235 (72%)	313 (96%)

これからは、あきらかに動作主または経験者を意味役割とする名詞句に主格が付与されている場合、当該名詞句は統語的に高い位置に存在していることが見える。動作主または経験者の主格名詞句の前方に他の名詞句が出現する比率は2割以下であるが、一方で後方に出現する比率は5割を超える。つまり動詞の外項で指定されている動作主・経験者の名詞句は、付加詞よりさらに外側にあるということになる。

このように比較的高い外側位置にある動作主などの名詞句と、動詞句の補部位置という比較的に低い位置にある名詞句の両方に、同様に主格が付与されていることを、統一的に説明するには、何らかの機能範疇が積極的に主格を管理して付与しているとみるより、default の格が存在すると思った方が、現象の説明手順としてより単純である⁽¹³⁾。

名詞は格フィルターによって何らかの格をもつか、側置詞句内部に生起しなければならない。側置詞句は、必須項については動詞によってそれが指示されているとしておき、日本語の「二、へ、デ、ヨリ、カラ、マデ、ト」の7つを側置詞としておくと、そういう指示のない必須項名詞句は、主格か対格か属格の3つの格のいずれかの格をもたなければならないことになる。このうち内項は、もし little-*v* が存在するなら、それによって対格を付与される。属格は標準的な日本語としては、名詞によって付与される位置にしか生起しない。名詞がとりうる格が上記の3つであるとするなら、残余の主格が default として付与されるということになる。そして非母語話者の日本語中間言語でも、主要部または機能範疇によって格が指定されない名詞に default の格が付与されるというこのメカニズムが機能していると考えられる⁽¹⁴⁾。

(13) 主格が default であるということについては、すでに井上 (1989)、Fukui and Nishigauchi (1992)、三宅 (1995) が指摘するところである。

(14) Fukui and Nishigauchi (1992) は、[In our Case-marking system, the role of functional categories in Japanese with respect to Case-marking is to license, under the structural condition of government, the realization of "default Case" on unmarked phrases. (中略) By contrast, functional

なおここで、主格付与という本節の本題からはややはずれるが、状態性の述語動詞の命題構造として、内項名詞句へ default の格が付与されるほかに、外項名詞句が存在する場合の形式を簡単にみておく。内項名詞句と外項名詞句をそれぞれ「InterN」と「ExterN」とすると、基本的には、

(34) $[\phi_P[\text{ExterN}][\phi \cdot [\text{VP InterN(ガ) Verb}]\phi]]$

という構造が想定される。この (34) での「(ガ)」は、default で付与された格である。ここに外項が存在するのは、それが必要とされる場合であり、内項と述語動詞で記述される状態の持ち主を示す必要がある場合である。

対象の所有についてその所有者を表示するための統語的な類型としては、Stassen (2001)、Stassen(2013) が指摘する以下の 4 つがある。(35a) だけが他動詞構造で、残余の 3 つは自動詞構造である。なお (35b) の「Oblique-Possessive」の下位に「Locational-Possessive」のほかに「Genitive-Possessive」がある。日本語では「町に図書館がある」という意味での「町の図書館がある」であるが、こうした属格は、日本語ではまた別の構文を形成している可能性があるのここでは省略した。

- (35) a Have-Possessive
 b Oblique-Possessive (Locational-Possessive)
 c Topic-Possessive
 d Conjunctive-Possessive

非母語話者の日本語中間言語で、内項名詞句が低い位置の主格をもつ状態性の動詞述語について、外項が出現する場合は、やはり以上の (35a-d) にしたがう。ただし (35d) の「Conjunctive-Possessive」は、今回の調査では明確には出現しなかった。それ以外の (35a) から (35c) は、それぞれ以下のような例である。

categories in Japanese do not have such features, and thus do not actually assign Case. All they do is, as stated above, save non-Case-marked phrases by licensing the realization of “default Cases” (ga and no) on them.」と述べる (p.29)。ここで述べられる「the structural condition of government」は、機能範疇による c-command を形成する構造のことであり、また本稿で問題とする非対格動詞の唯一の項が比較的低い位置でもつ「ガ」については扱われていないので、理論的にはさらなる議論が必要であるが、ここでは、日本語学習者の中間言語にみえる現象とそれへの基本的理論枠組みの指摘にとどめ、詳細は将来への課題としておきたい。

- (36) a 二人が この身長のコМПレックスが あります
 b 私の家族に 小さいパーティーが あります
 b' 海で 波が あります
 c 先生は 教え方が あります

それぞれの例で見えるように、状態を示す動詞述語の状態の所有者は、他動詞の動作主と同様の主格、場所を示す「ニ」または「デ」、および主題表現で示されている。今回の調査で主格名詞句より高い位置にある外側の名詞句が出現している例は 121 例あり、そのうちわけをみると以下のようなになる。

(37)	主格（他動詞構造、Have-Possessive に相当）	8
	格助詞「デ」（Locational Possessive）	29
	格助詞「ニ」（Locational Possessive）	32
	主題（Topic Possessive）	52
	小計	121

このことも、非母語話者の日本語中間言語における状態性述語が、その命題部分における名詞句に対する格付与において、言語普遍的に機能していることを示す。こうした全体的な合理性も、little-*v* を欠如させることが、状態性述語の内項に主格を付与するというメカニズムが中間言語において機能していることを支持するものであると考える。

4 「ハ」

本節では、中間言語において助詞「ハ」がどのように付与されているかを観察議論する。「ハ」は、母語としての日本語文法においては提題助詞とされ、その機能は主題の表示にあり、「格」表示ではないと扱われる。これに対して本節は、非母語話者の中間言語においては一定割合の「ハ」が TP レベルで時制辞によって付与されている可能性を指摘する⁽¹⁵⁾。

標準的な日本語文法では、主題は談話レベルにある要素であり、構文的な要素である主語とは異なるとされる。よって主語以外の名詞句も主題化される。本稿で分析する非母語話者の会話データ中にも同様の用例は見出される。以下の (38) 例は、いずれも今回の調査対象とした日本語学習者の発話中に出現している例であるが、(a) は「食べる」の目的語が主題化されており、

(15) たとえば小泉ほか (1989) で「ハ」を格の一種とするように、文レベルでの「ハ」の機能については、母語としての日本語文法においても議論が残るが、ここでは母語としての日本語においては提題助詞であるとしておく。

(b) は「私の母」の修飾要素が主題化されている。

- (38) a ご飯は、えーっと帰ってから、八時に食べました。
 b 私は、昨日に母がウィーンに来て、一緒にショッピングしました。

こうした例からは、非母語話者の助詞「ハ」も、母語話者と同様に TP より上のレベルで操作されているものがあると言うことができる。その場合、主題名詞句を「TopicN」とすると

- (39) [CP[TopicN] [TP] C]

といった、抽象的な機能範疇である Topic をその一部とする CP 階層内に、CP の Left-Periphery として主題が出現するという、母語話者の日本語文法と同質の構造が機能していると考えることができる。

しかし名詞の意味役割が動作主または経験者である用例を観察すると、必ずしも (39) のような母語話者の日本語文法と同じような構造が機能しているとはいいがたい一定の割合の用例があることが示される。それは以下のような現象である。

前節で状態述語が表示する状態の所有者に主格の場合と主題の場合があることをみた表 (37) では、主題が主格の6倍を超える使用量となっていた。この使用量の差は、本稿で調査した2項動詞において、外項の意味役割が動作主または経験者である場合全体に共通して認められる現象である。前節でみた内項が主格となっていた例とあわせて、内項が対格および二格で表示される用例のそれぞれの外項の形式をまとめると以下ようになる。

(40)

外項の形式	内項の形式			小計
	主格	対格	二格	
「ガ」	8	19	19	46
「ハ」	52	141	78	271
小計				317

この表では、2項動詞の動作主または経験者名詞句が、圧倒的に「ハ」でマークされていることが示される。「ガ」と「ハ」を合わせた317名詞句のうち、約85%の271例が「ハ」である。内項が二格の場合にはその比率がやや低くなるが、その低い場合でも「ハ」が「ガ」の4倍以上あり、全体では「ハ」が「ガ」の6倍以上となる。このことは、非母語話者の2項動詞の外項は、「ハ」によって表示される強い傾向があることを示す。

これを中間言語における強い傾向であると主張するためには、「ハ」が「ガ」より優勢であるという現象が、日本語学習者の中間言語の特性であるのか、それとも母語としての日本語におい

でも同様なのが確認されなければならない。

日本語母語話者の主格と主題の使い分けは日本語文法の大きな問題であるが、統語レベルでは主題と主格はどちらも同一の環境に出現しうる⁽¹⁶⁾。石川 (2013) は、名詞・代名詞に後続する「ハ」と「ガ」の頻度を「現代日本語書き言葉均衡コーパス」で調査し、「ハ」の選択率が 49.28% であって、「ハ」の頻度上の優先性は確認されないと述べている⁽¹⁷⁾。

いまこの石川 (2013) にならって、本稿で扱うデータと同質の会話資料である大学共同利用機関法人人間文化研究機構の「日本語日常会話コーパス」で主格と主語を調査してみる⁽¹⁸⁾。ただし意味役割を動作主または経験者とする外項名詞句が主格で表示されるか主題で表示されるかを逐一調査することは量的に難しいので、近似的に、人称代名詞「わたし、あなた、彼、彼女」および人名に後続する「ガ」と「ハ」の量を調査することで、そのめやすとする。調査結果は以下のとおりである。

(41)	人称代名詞	人名	小計
「ガ」	616	695	1311
「ハ」	846	564	1410

この表からは、日本語母語話者の会話データにおける主格「ガ」と主題「ハ」の使用頻度に大きな差はみられない。このことは、人称代名詞や人名など動作主または経験者となる可能性の高い名詞が、TP 内部において主格をもった主語のままに留め置かれるか、それともそこからさらに CP に移動した主題であるかという選択が、ほぼ 50% 程度の同程度の比率であり、特に主題化が傾向的に選好されるわけではないということを意味する。

これに対して、非母語話者の日本語中間言語に関する表 (40) では、動作主または経験者名詞句の表示が「ハ」に強く偏向している。もし談話レベルでの提題という母語話者の「ハ」生起メカニズムが、(41) 表で示したような「ハ」と「ガ」がほぼ同数となるような結果を生むものであるとするなら、中間言語における動作主または経験者が「ハ」に強く偏向することは、提題とは異なる別のメカニズムが機能していることを示唆する可能性がある。

本稿で調査した資料における助詞「ハ」の使用数は、対格および主格の際と同様に修正した例を除外し、動詞述語に対するものだけをカウントすると、全部で 643 例となる。この用例のうち、それが付随する名詞句の意味役割が動作主または経験者である用例を調査すると、以下の表 (42) のようになる。なお比較対象のために主格の「ガ」をもつ名詞句の数値も示す。

(16) この問題は、ゲオルギエバ (2015) や浅山 (2004) が詳細に論じる。

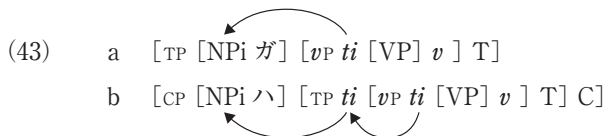
(17) 石川 (2013)、p.214 を参照。

(18) 「中納言」で公開されるコーパスを利用する。https://chunagon.ninjal.ac.jp/cejc/search 2024 年 9 月 29 日最終確認。

(42)	全用例数	動作主・経験者の用例数
「ガ」	415	88 (21.2%)
「ハ」	643	448 (69.7%)

この表 (42) は、助詞「ハ」でマークされている名詞句のうちの約 70% が動作主または経験者であることを意味する。さきほどの表 (40) が、動作主または経験者名詞句の 85% が主格ではなく助詞「ハ」でマークされることを示していたことと併せると、動作主または経験者という意味役割と助詞「ハ」とがきわめて強い相関性をもっていることになる。

意味役割が動作主または経験者である名詞句は、構造的には *vP* 内部から TP 指定部に移動して、主格「ガ」が付与されて主語となる。以下に (43a) として掲示する構造である。これが主題化されると、(43b) の構造となる。動作主または経験者名詞句が主題化されるためには、*vP* 内部から TP 指定部、さらに CP 指定部へと 2 回移動することになる。



先に述べたように、母語話者の日本語では、(43a) のように主格のまま主語の位置に残存するか、(43b) のように提題助詞によって主題化されて CP 指定部に移動するかは五分五分の確率ではないが、非母語話者の中間言語では、圧倒的に「ハ」で表示される。

この数値的な偏向は、母語話者の中間言語における「ハ」が、(43b) のような主題表示ではない可能性を示唆する。もし中間言語における「ハ」が談話レベルの要請によって CP 階層で Left-Periphery に移動したのだとすれば、助詞「ハ」をもつ動作主または経験者名詞句は、(43a) のような、CP 階層より以下の TP レベルに残って、TP の指定部位置にあるいわゆる主語名詞となっている可能性を意味する。以下のような形式である。

(44) [TP [NPi ハ] [*vP* *ti* [VP] *v*] T]

ところでテンスにはテンスと関わる副詞句が存在する。この副詞句はテンスと呼応するので、TP の左端の付加詞の位置に出現する。今回調査した例としては以下のような文である。

- (45)
- a 昨日に 母がウィーンに来た。
- b 学生の時 私が中国語を勉強した。

母語話者の文法としては、主題は TP より上位にあるので、もし上の (45) の主語が主題化した場合、以下のような形式が標準となる。

- (45) a 母は、昨日 ウィーンに来了。
b 私は、学生の時 中国語を勉強した。

もし上述したように、非母語話者の日本語において、助詞「ハ」を付与された名詞が、一見そう見える主題として CP レベルにあるのではなく、TP レベルの主語の位置にあるとする可能性が正しいとするなら、テンスの副詞的表現は、「ハ」名詞句より高い位置、すなわち (44) の「NPi ハ」の外側の位置に出現することが予測される。実際のところ、今回のデータでは、以下のような例が散見する。

- (46) a 来年 私は 行きたいです。
b 子供の時 私は よく漫画を読みました。
c 十九世紀に、ラーマ五世は タイを変更開発した。

これらは、テンスに関わる副詞的表現が、「ハ」名詞句より高い位置に出現している例である。今回のデータ中で、動作主または経験者名詞句に助詞「ハ」が添加されている例について、「昨日、先週、去年、××歳の時、×月×日」といったテンスと関わる副詞的表現の位置を調査すると以下ようになる。

(47)	テンスの副詞的表現の数	
	「ハ」名詞句の前	19
	「ハ」名詞句の後	11

明確に数値に差があるとは判断しにくいところだが、2 倍まではいかないとしても、傾向的に「ハ」名詞句より前の位置にテンスの副詞的表現が出現している例の方が多い⁽¹⁹⁾。そうした文における助詞「ハ」をもつ名詞句は、時制辞句の内部にあることになる。このことは、少なくとも助詞「ハ」をもつ名詞句の一定の割合は、(43b) のような TP の上位という構造位置ではなく、(44) のような TP 内部の位置にあることを意味する。

本来の主題化名詞は、それに後続するひとつの述語句のみに対して主題として機能するだけでなく、さらにその後の述語句に対しても主題として機能しうる。いわゆる「ハ」は大きくかかるとされる現象である。たとえば以下は先に (38) として引用した主題化名詞句に付与された

(19) この調査では、「いつも」や「ずっと」のようなアスペクトに関わる副詞的表現は除外した。さらに副詞「今」も、文末の「～ている」形式と呼応している例が多く、アスペクト的とみなして除外したが、副詞「今」は「ハ」名詞句の後ろに出現する例が 8 例と多い。この問題は本来は無視できないが、ここではとりあえずアスペクト用の副詞と見なして不問とした。

「ハ」の例のうちの1つであるが、ここでは主題化名詞「私ハ」は、直後の「母がウィーンに来て」だけでなく、それに後続する「ショッピングした」に対しても主題として機能している。

(48) 私は、昨日に母がウィーンに来て、一緒にショッピングしました。

しかしもし、非母語話者の中間言語における助詞「ハ」が、CP レベルの主題を表示しているのではなく、TP レベルでの主語を表示しているとすれば、(48) のような用例ではなく、助詞「ハ」が付与されている名詞句の直近の述語動詞に時制句が付与され、そこで発話が終止しているはずである。以下のような例である。

(49) ほかの友達は 私と一緒に行きました。

これに対して発話が終止していないとするのは、以下の (50a) のようないわゆる「テ形」をもつ並列節の用例、(50b) のような連体節（トキ節）の用例、(50c) のような「ガ」で接続している用例、(50d) のような「カラ」理由節などである。

- (50) a (ゲームの) 全チームは いつも対戦して、いつも人殺しをしてしまいました。
 b 私は フランスへ行った時に、友達を会いました。
 c 私は 日本に来たいですが、今まで時間がなから、行けませんでした。
 d 私は いま会計学を勉強していますから、将来には日本に勤めたいと思います。

こうした用例を除外して、動作主または経験者の「ハ」名詞句の直近の動詞述語が、時制辞をもって終止している用例量を調査すると以下ようになる。

(50)	全用例数	直近の動詞が時制をもって 終止している例数
動作主または経験者+ハ	448	320 (71.4%)

この数値は、「ハ」でマークされる動作主または経験者名詞句のうちの 70% 以上の用例で、直近の述語動詞が時制をもってそこで終止していることを示す⁽²⁰⁾。この分布も、非母語話者の中間言語における助詞「ハ」付与が、談話レベルでの主題化のためのものではなく、直近の動詞の

(20) すでに見たように助詞「ハ」の多数は動作主または経験者名詞句に付与されているが、今回の調査ではそれ以外の名詞句に助詞「ハ」が付与されている例が 195 例、約 30% がある。それらのうち相当数はいわゆる非対格動詞の項名詞に使用された類で、やはり「主語」と見なすことも可能であるが、そうでは

TP 内部にある可能性を支持する。

さらに、直近の述語動詞が終止していない場合も、助詞「ハ」をもつ動作主または経験者名詞句の直近の動詞がいわゆる「テ形」となっている用例の半数程度に、以下のような用例が見受けられる。

- (51) a お父さんは 病院にいて、お母さんとお父さんと話しています
 b 外国人は 始めにモスクワに来て、一番の有名な所は赤い広場ですけど

これらの例では、文の冒頭の「お父さんは」や「外国人は」という名詞句は、直近の述語「病院にいて」や「モスクワに来て」の範囲にとどまっており、文が最終的に終了する「話しています」や「広場ですけど」とは関与しない。「病院にいて」や「モスクワに来て」など直近の述語動詞が「お父さんは」と「外国人は」という名詞句が位置する最大範囲の右端であるとすれば、そこに Force を末端とする CP 階層が形成されているとは考えにくい。

非母語話者の日本語中間言語における助詞「ハ」が CP 階層の Left-Periphery 内に出現するのではなく、TP の最上部で時制辞によって付与されているという構造的な位置については、三宅 (1995) が、日本語母語話者の文法としてもその可能性を指摘するところである。以下のような構造的な位置である。

- (52) [TP[TopicN][[VP] T]]

非母語話者の日本語中間言語においては、助詞「ハ」は、CP 階層の Left-Periphery 内部で抽象的な機能範疇によって付与される場合もあるが、同時に一定の割合で、この (52) のような TP 内部の最左側で時制辞によって一種の「格」として付与される場合があると考えることが可能である。

5 まとめ

以上、本稿は非母語話者の日本語中間言語における名詞句の格の付与について、以下の議論をおこなった。

ない斜格名詞句の主題化例や格関係をもたない名詞句の主題化例なども含まれる。これらの名詞句に付与された「ハ」の問題は、またあらためて論じたい。

- (53) a 助詞「ヲ」による対格は、little-*v* によって VP 内部で付与される
 b 助詞「ガ」による主格は、little-*v* の欠如を契機として VP 内部で default の格として付与される
 c 助詞「ハ」が一種の格となる場合があり、それは TP 内部の最左側で時制辞によって付与される

このうち (53a) は、言語普遍性に基づく合理性のある付与規則であり、学習者が自立的に形成する中間言語文法である。

また (53b) の主格付与は、日本語に本来的に内在する主格の不安定性が非母語話者の日本語に、little-*v* が欠如する場合の内項への格付与規則として現れたものと考えられる。このとき、学習者がどのようにして VP 内部での default 格としての「ガ」という格付与メカニズムを獲得したのかは、それが言語普遍性に基づくと考えにくいので、未解決の問題となる⁽²¹⁾。

一方で、(53c) の「ハ」付与メカニズムは、(53b) が予想する主語のための主格の不安定性あるいは不在という問題に対して、それを補充するためのメカニズムとして成立したものであろうかと推測される。主語と主題の重なりは多くの言語で観察される現象であるので、本来主題化マーカーとしてある「ハ」が、TP レベルで主語の格表示の代替として、いわゆる「主格」に準ずる扱いを受けることは、言語普遍性としては合理的なありかたかと考えられる。

以上、日本語学習者の発話における「ヲ」、「ガ」、「ハ」という3つの助詞について、その付与メカニズムを、学習過程における文法把握不全の問題または使用過程における意味的理解の不十分の問題とはせずに、合理的な付与メカニズムとして解釈が可能であることを論じた。

参考文献

- 浅山友貴. 2004. 『現代日本語における「は」と「が」の意味と機能』. 第一書房
 浅山佳郎. 2008. 「デ格名詞句と主語の位置」. 『獨協大学日本語教育紀要』3 ; 22-35
 浅山佳郎. 2009. 「ヲ格・ニ格名詞句と目的語の位置」. 『獨協大学日本語教育紀要』4 ; 31-45
 浅山佳郎. 2022. 「慣用的 VP の構造について」. 『獨協大学外国語教育研究所紀要』10 ; 25-44
 Arad, Maya. 1999. On "Little *v*". Papers on Morphology and Syntax, Cycle 1. MIT Working Papers in Linguistics. 33 ; 1-25
 Collins, Chris. 1997. *Local Economy*. Cambridge, MIT Press
 伝康晴、小木曾智信、小椋秀樹、山田篤、峯松信明、内元清貴、小磯花絵. 2007. 「コーパス日本語学のための言語資源：形態素解析用電子化辞書の開発とその応用」. 『日本語科学』22 ; 101-123
 Fukui Naoki and Nishigauchi Taisuke. 1992. Head-Movement and Case-Marking in Japanese. Journal of Japanese Linguistics 14-1 ; 1-36
 ゲオルギエバ、ペロニカ トドロバ. 2015. 『日本語学習者における文法知識の習得—ガ格をマークする「は」と「が」を事例に一』. 早稲田大学 博士論文 (日本語教育学)

(21) 可能性としては、多様な文法関係への汎用的な存在として、繫詞 (linker) のメカニズムが発動したものか考えることができるが、詳細は別稿にゆずりたい。

- González-Vilbazo, K., López, L. 2012. Little *v* and parametric variation. *Nat Lang Linguist Theory* 30 : 33–77
- 長谷川信子. 2007. 「日本語の受動文と little *v* の素性」. *Scientific approaches to language* 6 : 13–38
- 井上和子. 1989. 「主語の意味役割と格配列」. 『日本語学の新展開』 くろしお出版
- 石川慎一郎. 2013. 「テキスト関連属性と助詞選択：計量的アプローチに基づく探索的研究—主語・主題を導く「は」と「が」をめぐる—」. 『第4回 コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 : 213–222
- 加賀信広、岸本秀樹. 2024. 『文の構造と格付与（最新英語学・言語学シリーズ 3）』. 開拓社
- 小泉保、船城道雄、本田晶治、仁田義雄、塚本秀樹. 1989. 『日本語基本動詞用法辞典』. 大修館書店
- 工藤和也. 2015. 「日本語 3 項動詞文の統語構造」. 『龍谷紀要』 36-2 : 75–89
- 三宅知宏. 1995. 「日本語の屈折要素と句構造」. 『阪大日本学報』 14 : 65–76
- 越智正男. 2022. Some Notes on Nominative/Genitive Object Constructions in Japanese. *Nanzan Linguistics* 17 : 117–130
- Stassen, Leon. 2001. Predicative Possession. In In Martin Haspelmath, Wulf Oesterreicher and Raible, Wolfgang (eds.), *Language typology and language universals: an international handbook*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter. : 954–960
- Stassen, Leon. 2013. Predicative Possession. In *WALS Online (v2020.3)*. <http://wals.info/chapter/117>, Accessed on 2024-09-28.

